

## 千葉集会をプレ全国大会として成功させよう

加藤公明(会長・日本史部会)

今年の千葉県歴史教育研究集会は1月28日(土)～29日(日)に千葉大学教育学部で開催されます。詳しい日程は同封のチラシをご覧くださいのですが、一日目にワークショップ(子どもも楽しめる教材フェスティバル)と開会集会、二日目には分科会、ワークショップ、閉会集会の予定です。

そして、いよいよ来年の8月3日(金)～6日(月)は千葉で3回目の全国大会です。分科会と閉会集会の会場は千葉大学教育学部、閉会集会での地域実践報告は浅尾弘子さんと決定しています。そう、来月の県集会と同じ会場、同じ報告者です。つまり、今回の集会はまさしくプレ全国大会として企画され、開催されるものです。したがって、分科会の会場となる千葉大教育学部の教室の使い方や浅尾さんの報告の方法などについて、大会での本番を想定して問題点や改善策を参加者のみなさんとともに検討したいと思っています。

むろん、プレ全国大会としたのは単に運営のための予行演習という意味ではありません。2012年8月に千葉で開催する全国大会を千葉県歴史教協としてどのような内容にするか。それを会員や集会に参加して下さるなかまとともに考え、一定の共通認識を図ろうというねらいもあります。

そのために記念講演を愛知県立大学の久保田貢さんをお願いしました。テーマは「子どもと地域に根ざす千葉県歴史教協の活動のめざすもの」(仮)です。久保田さんは社会科教育学の研究者として広く全国の実践を読んでおられます。そして、民主的で平和な社会の担い手を育てるという社会科教育の原点から考えて、いかなる実践がどのような意味で価値をもつかを盛んに研究し、発表されています。その久保田さんに、千葉県歴史教協が長年すすめてきた授業実践や地域活動(掘りおこし)はどのように分析・評価していただけるのか。千葉県歴史教協に結集しているわれわれ自身はまずは自分たちの実践や運動の価値を確認し、それをもとに全国大会では何をどのように発信していくかをみんなで考えようというわけです。

浅尾報告についても同

### 千葉県歴史教協の集大成が

#### 1枚のDVD(2011年改訂版)になりました

このDVD(「わたしたちの歩み 2011年改訂版」)は、私たち千葉県歴史教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言っても過言ではありません。千葉県歴史教協の会員であっても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴史教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならないと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり返り、財産となることを期待しています。

このDVDをご希望の方は事務局までご連絡ください。1枚千円です(郵送料含む)。(M)

---

様です。千葉市内の「底辺校」とされる高校で、勉強や学校に劣等感や疎外感を持っている生徒たちをいかにして授業に興味をもたせ、社会への目を開かせるか。そして、彼らを自立した社会人として成長させ、なかまを信頼してともによりよい社会をつくっていかうという意欲を持たせるか。浅尾さんの教師としての努力は生徒のかたくなな心を徐々に解放し、彼らを平和な社会で自由に生きる権利と基本的人権のために「不断の努力」(日本国憲法第12条)をする主権者として成長させていかうしました。

社会科教育が今、危機的な状況にあります。子どもたちからは暗記教科として嫌われ、教師たちは学習指導要領や教科書通りに授業することを強いられて、自分で授業をつくる意欲を削がれています。その一方では、自分たちの右翼的な政治思想を子どもたちに押しつける媒介として歴史教育(おもに教科書)を利用しようとする「つくる会」系の組織の動きも活発です。そうした状況のもとで、社会科教育が今後も平和と民主社会の担い手を育てるという役割を果たしていくには、まず何より授業を受けている子どもたちに自分たちの成長を実感できる教育の機会として認知してもらわなければなりません。そして父母市民に、そして世界の平和と民主社会を希求する多くの人々に支持され、支援されるものにならなければなりません。そのためには、従来の知識偏重、暗記主義、教え込みの社会科教育ではない、それとは正反対の、生徒が主体的に歴史や社会に疑問を持ち、なかまとともに探究し、その解決策を提起する社会科教育が求められています。浅尾実践はそのような新たな社会科教育の可能性を開くものであり、千葉県歴教協が前回の全国大会(1994年)以来、会誌のタイトルとして掲げて追及してきた「子どもが主役になる社会科」の一つの到達点です。その内容を今回の講演を通じて、われわれ自身が自分の実践や研究に照らして学ぶとともに、全国大会ではいかにしたら全国のなかまに、実践の内容とそれに基づく主張が十分にわかってもらえる報告になるか、ともに知恵を出し合おうではありませんか。

ところで、千葉県歴史教育研究会の魅力はなんといっても、充実した分科会討議です。今回も30本以上のレポートが準備されています。小学校、中学校、日本、世界、地域、平和と民主主義の6分科会に分かれて報告され、それにもとづく討議が行われます。どの分科会でどのようなレポートが報告されるかは集会のチラシをご覧くださいなのですが、小学校から大学までの授業実践の報告や社会科教育についての研究、地域の掘りおこしや地域運動の報告など多数の多様なレポートが用意されています。また、小学校、中学校、日本、世界の分科会では学生や若い教員のためのオープングレポートと題して、授業づくりの基本的な方法や授業の進め方などまで具体的に明らかにして学(院)生や若い教員の要望に応えようという企画も準備されています。若い教員・学(院)生による報告や模擬授業が多いのも今回の集会の特徴です。

分科会での討議は、それぞれのレポートをじっくり聞いた上で、その主張を理解し、問題点や課題、発展の方向性を探るためのものです。したがって、報告者やベテラン参加者だけでなく初めての参加者も多くのことを学ぶことができます。発言することもできます。そして、報告者には、そのような討議をふまえてご自分のレポートをよりグレードアップさせ、ぜひ全国大会で報告してほしいと考えています。そうして、大会のすべての分科会に千葉から、優れた内容の、主張の鮮明なレポートが数多く提出され、大会の討議の質を高める役割を果たしていただきたいと思っています。

最後に、なるべく多くの方々に参加していただきたく、われわれ千葉県歴教協はさまざまな手立てを講じてきました。2日間、保育を行うことにしたり、ボランティアスタッフとして集会の運営や設営を手伝っていただきながら集会に参加する学生・院生のための制度\*をつくったのもそのためですが、その他、なにかご要望があれば事務局までご連絡ください。では、来月28日(土)~29日(日)に千葉大学教育学部でお待ちしております。

\*事前の登録が必要です。問い合わせはchibarekkyo@csc.jpです。

### 第3回全国大会現地実行委員会まとめ

柄澤守(現地実行委員会事務局長)

---

第3回全国大会現地実行委員会が、11月27日に行われました。今回は、主に年内に概略を確定する必要がある「地域に学ぶ集い」と「現地見学」について検討しました。

### ①地域に学ぶ集い

加藤公明さんがキャップです。現在本部企画も含め15前後の企画があります。福岡大会では12の分科会がありました。一部参加者が少なく講師に失礼があったようです。とすると数が少し多い気がします。千葉の場合は福岡と比べ参加者も多いでしょうし、分科会ごとに県内の参加者がある程度事前に確保しておくことが可能ならば、無理に削る必要はないかもしれません。

### ②現地見学

前田徳弘さんがキャップです。現在、プレコースが3つ、大会後のコースが7つの企画が出ています。福岡ではプレ4、大会後11でした。現地見学は、地元のカラーがはっきり出る大会の顔です。各支部で、魅力あるコースづくりはもちろんです。行ってみたいくなるタイトル、参加者が満足する講師陣など、骨格が示せるように準備していただくことになりました。タイトル・講師・見学地(正式名称を確認)・大まかなタイムテーブル・担当者をプリントにまとめ、前田さんに届けてください。なお、担当者は1月下旬までに歴史地理教育の現地見学特集の原稿を書く仕事もあります。

### ③役割分担

事務局で担当するところを除き、松戸(会計)、習八(分科会)、世界史・東葛(荷物輸送)、日本史(書籍物販)、船橋(受付)、千葉(速報)という分担が決まりました。その他の支部は、仕事の進み具合に応じ臨機応変にサポートをお願いすることになります。仕事をする上でわからないことは事務局までご相談ください。

実行委員会もようやく本格始動した感じです。全体会の講演者がまだ決まっていないところを除いて、骨格から肉付け作業に仕事が移ってきました。年が明けるといよいよ忙しくなると思いますが、支部活動を軸になかまをふやして、大会への参加、協力を呼びかけてください。多くの人に関わることによって中身の濃いものができるようになります。また会員だけでなく、歴教協と親交のある他団体にも声をかけてください。3月の全国委員会がレポートの最終締切ですから、1月中に報告することを決めておく必要があります。私も知人に片っ端から「来年の8月は頼むよ」と声をかけてきましたが、単なる人手ではなく、学べる時間としてすごしてもらうにはどうしたらいいか考えています。

## 歴博講演会「考古学から見た古代の日韓交流」を聞いて

及川敏男(香取支部)

佐倉の歴史民族博物館では、毎月第2土曜日に歴博講演会を開催している。同“友の会”のニュースで、テーマを知り、年に1~2回は聞きに行っている。今回は7月9日(土)に「考古学から見た古代の日韓交流—朝鮮半島の前方後円墳をめぐって—」と題して、同館研究部考古研究系の高田貫太先生の話だった。高田先生は、まだ若く、旧海上町出身で市立銚子高卒とのことで何となく親しみを感じた。岡山大学から韓国へ留学しての研究の成果をわかりやすく話していただき、大変勉強になった。その内容の一部を紹介したい。

日本列島固有の墓制と考えられていた前方後円墳が、1980年代に、朝鮮半島南部の榮山江(ヨンサンガン)流域で発見され、現在では13基が確認されている。築造は、5世紀後半から6世紀前半の短期間に集中している。475年、百済の首都漢城(ハンソン)が高句麗に攻められて落城し、百済は首都を熊津(ウンジン)に移し、半島西南部の統合を志向する。その時期に当たる。

講演では、多数のスライドを通して具体的な古墳や近辺の考古資料を映し出して、ていねいな説明があった。そこから、前方後円墳の諸要素として倭系の特徴のみならず、百済系、在地系のそれとの混在して認められるとされた。

前方後円墳の被葬者については、次のような見解があるという。

(1)在地首長説1 西南部の諸地域首長は百済との一定の関係を結びつつ、倭の諸勢力とも政

---

治的な関係を結び、対外的な政治的アピールとして前方後円墳を採用した。

(2) 在地首長説2 (すでに百済と榮山江流域は「支配的同盟関係」を結んでいたが) 漢城陥落により、一時的に百済の影響力が低下し、在地首長層の政治的自立性が高まった。そして倭との関係を深めた。

(3) 百済系倭人説 前方後円墳の分散性、百済系属性と倭系属性の混在、「倭系百済官人」(『日本書紀』)の語句などから、在地勢力の牽制を目的として百済王権より派遣された倭人とみえる。

この他にもさまざまな説があるようだ。

講演の中で、高田先生は「韓国人が古墳など考古学を研究する場合、必ず日本語を勉強しなければならない。かつて植民地時代に日本人研究者により発掘報告書が作成されており、それらを十分読み、研究の再整理をすることが求められるからだ」と言われた。植民地時代には、日鮮同祖論など植民地支配を正当化するために朝鮮半島と倭との深い同盟を強調しようとしたことをいまだに引きずっていることに日本の過去の責任を痛感する。

最近届いた『歴史地理教育』7月増刊号の特集「日本列島と朝鮮半島の交流」にも河南高校朴星奇(パク・ソング)の実践「古墳や遺物から見た古代韓日関係」が報告されており、「韓国にある前方後円墳」が紹介されているので参考となる。(「香取歴教協ニュース」494号より)

□リレー書評⑤／石井建夫『石井建夫著作集 はてなの社会科—再び“希望と生气”を語る社会科を』国土社、2011

## 石井さんを偲んで

長屋勝彦(東葛支部)

ずいぶんご無沙汰していた石井さんから立派な本が送られてきたとき、少し元気になられたのかなと思ひながら、ぼらぼらと斜め読みというより、思い出を振り返りました。

石井さんとは教員生活を始めたころから、千葉県歴教協の中学校社会科の大先輩としてたくさんのかたを学びました。その後、大会委員長に就任され、一緒に大会づくりの仕事をしました。東京大会の準備の打ち合わせをした際、不調を訴えておられましたが、以後はメールでお話するのみとなってしまう、やがて音信不通の状態でした。今年になり、本を贈っていただき、元気になってひよっこり事務所にくられる日を夢見ていましたが、それもかなわなくなりました。同じ大会委員会で活動していた前大会事務局長の背戸さんが、故郷山口の、海を隔てた隣の北九州での大会を楽しみにしながら亡くなられてまだ1年、後を追われた石井さんは、来年の千葉大会が目前でもあり、さぞ無念だったことでしょう。

石井さんとは、千葉県歴教協以外にも、歴教協常任委員会や、大会委員会、また、石井さんが一時期組合の委員長をされていたこともあって、同じ全教千葉の組合活動など、多くの場で学ぶ機会を与えられたことは本当に幸運でした。

石井さん以外にも、スタートは安井俊夫さん、その後、大野さん、三橋さん、庵原さん、白鳥さんなど、中学校社会科の先輩たちから、多くを学び、いろいろ真似して、その中から自分なりの授業スタイルができてきました。

第一部に収録されている、石井さんが中学校に勤務されているときにまとめられた実践からは、私の授業の基礎となったものがいくつもあります。飯場の出稼ぎ労働者の実践を聞き、長野県小谷村での土石流事故を教材化するため、現地まで足を運んだことがありました。満州侵略の実践は、より単純化し、相反する幣原と松岡の二人だけの考えを比較させました。いただけるものは何でもいただいて消化してきました。

やがて現場を離れられた後は、危ない教科書との戦いに一緒に取り組んだことも大きな思い出になっています。右翼に妨害されることもありましたが、どこでやっても熱気でいっぱいだったことを

---

覚えています。

石井さんは、「大東亜共栄圏」をテーマにした「つくる会」側の指導書に沿った模擬授業で、市民の人たちにリアルに危険性を体験させる取り組みをされました。同席したときは、中学校の現場の実態を話したり、採択の現状を語りました。授業づくりのために石井さんは、一冊1万円もするつくる会教科書の指導書を、歴史と公民の2冊も入手し教材研究をされていました。この指導書と付録でついている單元ごとのワークプリントに「つくる会」の本質が一番現れていることも教えられ、その後お借りして自分なりの反撃のねたづくりを行いました。そして講師を頼まれた際は、「日本国憲法制定」をテーマに、石井さんがされたように、つくる会側からの模擬授業を行いました。

これまで石井さんの授業実践からは多くを吸収させてもらいましたが、晩年の社会科教育研究の理論的な面については、深く学びきれていないのが正直なところですが、明日の授業に直結しないとなかなか意識が向きませんが、この本を手にしたことをきっかけにして、深めてみなければと感じています。

教員生活も定年延長を考えなければあと8年です。気力はあるものの体力が続かなくなりつつあります。気力が続かなくなることをないように、年を追うごとに社会科を極められた石井さんに少しでも追いつけるよう日々の実践に取り組みたいものです。

## 高麗大学校で「福島戦後史」の授業をして(1)

三橋広夫(千葉支部)

2011年11月24日(木)、高麗大学校「日本史」の授業を借りて「福島戦後史」を話した。授業というよりもPPを使つての講義だ。「考える授業」を主張してきて講義しかできないのは情けない。それでも今回は(というのは毎年1回こうした授業を続けてきて3度目になる)どうしてもフクシマについて語りたかった。3月11日金曜日午後2時46分。この日以後のさまざまなできごとを韓国の大学生にどうしても理解してもらおうと、そして「原子力の平和利用」などというまやかさをなぜ受け入れてきてしまったのかを考えてもらおうと強く思ったのだ。

原子力のしくみよりも、放射能による汚染の現状をいくつかの画像とともに紹介し、第一原発から漏れた放射能が日本ばかりかウラン235がハワイにまで到達していることを明示した。なかでも「この先立ち入り禁止」という福島の写真(伊達市月館町)は圧倒的だった。ガイガーカウンターの針が「毎時30マイクロシーベルト(通常の300倍)をさしている」とコメントするとざわついていたのが印象的だった。

そして、場面は1950年代の福島に変わる。常磐炭鉱での人々の、特に子どもたちのようすを映し出した。路地で遊ぶ子どもたち、洗い場の子どもたち、微笑む男女の子どもたち。だが、遊んでばかりはいられない。「子どもも働く」という写真は女の子が「炭ガラ」と呼ばれる石炭箆をしょって石炭ガラを運んでいるシーンだ。そして、「メーデーに集まる炭鉱労働者」。そして、この常磐炭鉱も閉山に追い込まれていく。

このような時代に、鉄腕アトムが生まれる。アトムは韓国人も知っている。韓国ではなんというか聞くと「宇宙少年アトム」だという。そして、1956年5月に広島原爆資料館で「原子力平和利用博覧会」が開かれる。その標語は「全人類の福祉のために、その前途は無限に輝いている」だった。被爆者も見学して「私たちは原爆ときいただけで心からの憤りを感じますが、会場を一巡してみれば原子力がいかに人類に役立っているかがわかりました。原子力が戦争にだけ使われるのではなく、真に平和のために使われるのを強く望みます。原爆地広島でこの博覧会が開かれたことは意義あることと思います」と答えている。

こうして「原子力神話」がつくられていくが、3月11日後の現在でもその神話は生きている。早稲田大学の校内に貼ってあった1枚のチラシがそれを物語る。「アトム通貨」と名づけられた地域通貨である。地域通貨の評価は別にして、その通貨がなんと「アトム通貨」なのだ。「北は北海道、南

北は北海道 南は沖縄県で流通中  
 新刊にも掲載された いま最も有名な地域通貨

# アトム通貨

早稲田・高田馬場支部 事務局  
アトム通貨公社  
<http://atom.community.jp/>

10 円券  
 50 円券  
 100 円券

**第8期  
 メンバー  
 募集中**

アトム通貨 早稲田・高田馬場支部 事務局  
 代表：落合智彦（社会科学部2年）  
 Tel: 03-5272-6366（代表携帯電話へ直通）  
 Mail: atom-member@hotmail.co.jp



は沖縄県で流通中。教科書にも掲載された今最も有名は地域通貨」と銘打っている。手塚治虫の『鉄腕アトム』によれば「高田馬場の科学省」でアトムは誕生したことになる。私はこのチラシを見て愕然とした。そして「神話」の力をまざまざと見せつけられた。

ここで、授業はさらに展開する。1954年3月1日、ビキニ環礁での水爆実験で第五福竜丸など1000隻以上の漁船が被爆したことをきっかけに、原水爆禁止署名運動が起こったことを紹介した。

その当時、福島県の大熊町や双葉町は「人口減少の続く過疎地であった」（『東京電力三十年史』）。そこに原子力発電所立地の話が持ち上がる。

少し後のアンケート調査では、「原発の誘致に賛成でしたか」という設問に56%が賛成と答えている。その理由は「地域開発、生活向上」である。反対は10%。「原発ができて良かったと思いますか」には、良かった(51%)、迷惑(16%)と答えている。理由は「道

路が良くなった、高い賃金の仕事がある」で、生活が向上し、出稼ぎに行かなくともよくなったことが原発に対する意識を形成していったことがわかる。このアンケートでは「『原発で事故が起こることは絶対はない』ということ信用しますか」と聞いている。これに対して「信用する」が49%、「信用しない」が31%と、前の二つの設問への回答とは異なる意識が見てとれる。やはり「絶対はない」「不安だ」というのが偽らざる気持ちだったのである。

このことは「原子力発電は原子爆弾と同じように危険であるというのが町民の声であった」（佐伯正治・東京電力調査事務所土木課長）の証言でも裏付けられる。この佐伯という人物が大熊町民らに「皆さんは原爆がどのようなものかご存知か。私は原爆を投下したB29とそのあと空に舞い上がったきのこ雲を見ている。多くの負傷者の看護にも当たった。その上私の兄も原爆で戦死した。皆さん以上にその恐ろしさは身に染みて知っている。したがって皆さん以上に真剣に原子力発電について勉強しました。原子力発電は核反応を静かに優しく行うように考えられておりその反応が万一予想以上に進むときは二重三重の防御を行い、これでもかこれでもかと安全対策をしているので私は安全だと信じています。いささかの不安があればいくら会社の方針とはいえ肉親を失った私は会社に従わない。何も東京電力しか勤めるところがないわけではないから私は東京電力を辞めます」と熱弁をふるい、町民の賛同を得ていく。

この論理に当時の多くの人々が賛成していた。先の展覧会での被爆者の声もそうだし、多くの進歩的科学家も軍事利用は認められないが、「平和利用」を進めるという意識だった。「原子力の平和利用」には、近代化への熱情さえ感じられる。近代化の粋としての原子力という意識だ。「被爆国日本だからこそ原子力の平和利用の権利がある」とまで言い切った学者もいたほどである。

これをさらに支えたのが「電源三法」である。田中内閣がつくったこの法律は、補助金によって「電源開発の建設を促進し、運転を円滑にしようとするもの」だったが、地域経済を歪ませ、自立性を奪っていくものとなった。双葉町を見ると、1983年に町の原発関連の固定資産税収が17億9700万円に達するかと思うと、1990年には町が交付税の交付団体になっている。つまり町の財政が成り立っていかなかったことを示している。だから、翌1991年に町議会が原発増設の決議をしているのである。こうして福島第一原発に6基の原子炉が設置されていく一方、町は2009年に自治体財政健全化法の「早期健全化団体」に転落する。破産である。

そして、「3月11日金曜日、午後2時46分」を迎える。（つづく）

メールで千葉県歴教協会報「なかま」を配信しています。ご希望の方は下記までお名前とその旨をお知らせください。  
 chibarekkyo@csc.jp  
 また、職場や地域のことなどもぜひご投稿ください。(M)